

保育実践ゼミナール

「やってみよう！科学する心×いのち真ん中社会の保育実践」

私の保育実践～最終報告レポート～

社会福祉法人栄寿会 わかな保育園 （茨城県）

鯉淵 裕志（ぶっちー）

「私」が大切にしている実践のテーマ

たくさんの美しい物語に出逢い、心が動く実体験

草や木、土などヒト以外の命と共に

はじめに…

幼いころ、裏山で駆け回り転んだ時にかいだ落ち葉の柔らかさ、背の高い金木犀に体を預けて見上げた空の青さ、そしてなんとも言えないあの香り。四季折々の野菜を育てていた祖母と共にいまだトウモロコシ、井戸水で洗った顔をなでる風の心地よさ…。私の体の中には身近な自然と暮らしのかかわりがしっかり根付いている。森・土・水・風・太陽・四季折々の出来事が私の原風景を豊かにしてくれました。

おとなになり、保育士として子ども達と暮らす中で、感性豊かな子どもたちの『美しい』と思うことに寄り添っていくにはどうしたらいいのだろう？と想いを巡らせたときに、そばで寄り添い、分かち合い、時に言葉で表現する…そんな大人が近くにいれば、子どもたちはこの世界をもっともっと信頼して、好きになって心と体を預けることができるのではないかと考えました。

子どもが一日の暮らしの中で大半の時間を過ごす保育園。わかな保育園で「たくさんの美しい物語に出逢い、心が動く実体験」をするには…、何か私にできることは無いかと葛藤を抱えながら日々暮らしていた時に、この「やってみよう！科学する心×いのち真ん中社会の保育実践」に出会いました。

そして全国の同じ思いを持つ仲間と一緒に手を取り合いながら、自分自身の学びを深め園に往還していきたいと考え、今回のゼミに応募させていただきました。

【ぐうたら村での実践を園に還して】

7月のフィールドワーク・ぐうたら村での暮らしの実践を通し、全国の保育者と一緒に体を通した手仕事を行いました。森と畑のつながり、菌や微生物の持つ力で落ち葉や草花が土に還っていくこと、身の回りのものすべてが暮らしの要素であり、意味を持ってすべてが循環しているコトを感じました。また、ヒトとヒト以外の命が共に生きていくことで暮らしが成り立っていることを肌で感じました。

園に帰ってからは、今までやっていたことを継続しさらに深めると共に、新たな取り組みも子どもや大人を巻き込んで実践しました。失敗を恐れずできたのは、ゼミの仲間や講師の先生方、そして園の子どもや仲間がいたからだといえます。

【実践の背景】

わかな保育園の園庭（通称わかなにわ）では0歳児～5歳児が一緒に遊びます。その中でやってみたと心が動いた子、気が向いた子、覗きにきた子が私の実践に参加してくれました。ある時はこどもだけ、ある時は大人だけ、もちろんこどもと大人が力を合わせてこともありました。

（実践1）マルチング



園庭の草を使ったマルチングは、こども達からも大好評。ネコジャラシ、マツヨイクサなど園庭に生えている草を、とにかくはさみで細かくします。毎日毎日チョキチョキ。切った草を、花壇に敷き詰めるまでに一か月以上かかるった果てしない手仕事。「大変だ～」と言いながらも、たくさんの子の手が加わることで、子どもたち一人一人が『自分ごと』として手を動かしてくれました。

また、マルチングをしていく中で、切った草が乾燥し色が変わることやパリパリと音がすること、切ったところから根っこが出て大笑い…。たくさんすることに気づき、言葉にする姿が増えました。

マルチングのことを、『草のお布団』と名付け、「花壇に優しくお布団かけようね。」という言葉聞いた時には感動を覚えました。

（実践2）バイオネストづくり

園庭の片隅の花壇。「もっと木を植えたい！」というスタッフの願いのもと、バイオネスト作りをすることになりました。木の枝から葉っぱをむしるのもこども達…。スタッフが木の枝を編み込んでいると、2歳児の女の子が見に来ました。じっと見つめた後に、枝を手に取り、スタッフと同じように編んで行きます。ジグザグジグザグ…。手仕事というより、あそびに近い感覚でしょうか。目で見て、考えて、やってみる…そんな姿がありました。

続いて4歳児の男の子たちは、むしった葉っぱを集め、バイオネストに敷き詰めてくれました。葉っぱが土に帰ることをマルチングの経験から学んでいたのでしょうか。「ここは葉っぱのお布団を敷いたから、入っちゃダメ。」と言い、中に入る子はいませんでした。木とジブンの居場所のすみわけ、暮らす場所の違いを感じ、幼いながらに感じ、自分より小さな子に伝える姿が見られました。



（実践3）落ち葉拾い



毎週金曜日は落ち葉拾いの日。近所の雑木林に行き落ち葉たい肥用の落ち葉を拾いに行きました。

ここでこどもたちが発見したのが小さな生き物『菌ちゃん。』落ち葉や木の枝についた糸状菌のことを「菌ちゃん」と呼び、大切に持ち帰ります。落ち葉を分解するには、この菌ちゃんの力を借りることがわかっているようです。

（実践4）コンポスト



給食室から出る野菜くずをコンポストに混ぜ、土に返していると、野菜くずが消えていくことを不思議に感じた子どもたち。きっと何かいるんだな…もしかして菌ちゃん？…菌ちゃんてすごいね！と目に見えない小さな命のことを『菌ちゃん』と呼ぶようになり、愛着を持ってかかわる姿が増えました。

8月のある日、野菜くずと米ぬかをコンポストに入れてこども達と混ぜていると「ご飯食べたから、お水飲むよね。」とバケツに水を汲んで水をあげました。保育園の大人が何も言っていないのに、人と同じように接していました。次の日になると、菌が活性化し温度が上昇…それを「菌ちゃんが喜んでくれた。」と大喜びすることも達。土の上に手を乗せ「菌ちゃん有難う」と声に出します。それはまるで手と手を取り合った関係性のよう…。見えない命との距離がグッと近づきました。こども達は素直にそのを感性を開き、菌ちゃんとの関係性をゆっくりと結んでいました。

（実践4）コンポスト②

9月のこと。年長児のA君は菌ちゃんがとても小さいことを推測し、自宅からおもちゃの顕微鏡を持ってきました。覗いてみると、白い糸状菌から沢山のひげが出ていると得意げに教えてくれました。A君は菌ちゃんが顕微鏡で見えるぐらい小さいから、口もとっても小さいと考え、今まで以上に野菜くずを小さく切るのでした。

毎日野菜くずを切る姿を見ていた1歳児さん、2歳児さんたちが、『菌ちゃんのご飯作り』に参加。年長児が中心になって自分の言葉で菌ちゃんについて語り始めた。その姿にあこがれを抱き、コンポストを混ぜたり、包丁で野菜くずを切ったり…あこがれから継承に変化していきました。

菌ちゃんコンポストを通し異年齢間の交流が増え、大人もこどもも保護者も巻き込んで、『菌ちゃん』という共通ワードができました。



中間発表を終えて

中間発表では実践したことを中心に語りました。ぐうたら村での2回目のゼミを経験し、園に帰ってから私がしたことは、今まで通り、毎日同じことを継続することでした。暮らしの中で続けることがいかに大変かを実感しつつ、共に生きるこども達のヤッテミタイという思いや、共に手を動かしてくれる仲間にも助けられました。実践を継続していく中で、すべてのことは菌ちゃん（小さな命）と関係深いことがこどもたちの中にずっと入っていったようでした。この実践はどこに行きつくのだろうか…という不安もありつつ、ゆっくり時間をかけたいという思いもありました。

S 君が紡いだ暮らしの実践

コンポストから野菜の収穫へ、収穫から調理の楽しさへのつながり



コンポストの土を使った畑、通称「菌ちゃん畑」そこで育った大根。この日のおやつは大根粥。小さな子も食べられるように、スタッフからみじん切りを託されます。毎日野菜くずを細かく切っている S 君はみじん切りが大得意。こどもも大人も彼がみじん切り名人なのをしています。自信を持って託されたことに向き合います。

調理から教えることへのつながり



12 月のデイキャンプ。寒い中釜戸でカレー作りをしました。この日も自信をもってみじん切りに挑戦し、託された自分の役割を全うする姿がありました。周りの友達からも信頼され、それに應えるかのように、「左手は猫の手だよ。」「切るときは前に押すんだよ。」と教える姿が見られました。自分の体を通したことを、教えることで学びが深まったように感じます。

道具との関係性の変化と使い方の探求



時を同じくして、箸作りも体験。自分で作ることによって、『便利なもの』から『自分を助けてくれるもの』として認識の変化が見られたように感じました。

今まで使っていた包丁・鉋・のこぎりをより丁寧に扱うようになり、『菌ちゃん』と同じように大切に始めました。道具を使う中で、より切りやすい方法はないか…、けがをしないためにはどうしたら良いか…など道具との関係が深くなればなるほど、彼の探求は進むのでした。

還るところは菌ちゃん



箸作りで余った竹を持ち帰り、年末年始の間、家で手作りの箸を作った S 君。誰かが喜んでくれるかも…と思いを入れた箸をはにかんだ顔で友達に配る姿が印象的でした。2 月の作品展では S 君の活動をもとに、箸作りワークショップを開催しました。

また、削った竹の屑も「菌ちゃんのご飯になるかも。」「焚火の焚き付けになるかも。」と捨てずに持ってきた S 君。考え方の基本になんでも土に返してくれるちいさな命への信頼感や、たき火の経験から、焚き付けに使えるかも…という実践知を自分の体を通し落とし込んでいます。

終わりに…。

実践を始めたときは小さな命にたくさん触れることで、ヒト以外の命に触れてほしい、たくさんの美しい物語に出逢い、心が動く実体験をしてほしいと願っていました。実践を通し、こども達は私の想像を遥かに超えて、感じ、考え、言葉にしてくれました。こども達は素直な感性で小さな命に寄り添い、愛着をもって愛おしそうにかかわっています。『菌ちゃん』という小さな命のキーワード。この言葉に始まりぐるっと回ってこの言葉にたどり着く。今が暮らしの中の循環に目が向けられるようになったスタートラインだと考えます。

私はこれからわかな保育園で、こども達と出来ることを毎日続けること、一緒に暮らす仲間が暮らしやすいように心を寄せること、お互い様の関係を気付いていくことを心掛け、こどもの学びを支える人であり一緒に面白がれる人、…そのような実践者であり続けたいと思う。

こども達と たくさんの美しい物語に出逢い、心が動く実体験を通し

草や木、土などヒト以外の命と共に暮らしていく。

これからも丁寧な暮らしを紡いでいきたいと思います。